



Japanese Association of Science & Technology Journalists

# JASTJ NEWS

## アメンボ航海記

瀧澤美奈子

私はあの日、アメンボになった。

シーカヤックが「スイー、スイー」とまっすぐに進む。体が音もなくすーっと前に進む不思議な感覚。東日本大震災の被災地の漁村をシーカヤックで巡って、被災住民の話を書くという水産生物学の先生の試みに参加したときのことだ。

權を漕ぎながら、「思えば遠くに来たもんだ」と感じた。本稿はテーマ自由ということなので、恥ずかしながら私自身のこれまでを書いてみたい。

幼少期、風景画を描くのが好きだった。うまくないので画家は早々に諦めたが、「写し取る」という行為そのものが好きだった。生まれも育ちも信州小諸で、北は浅間山、南は八ヶ岳、そして千曲川が流れる盆地には、見渡す限り田園風景が広がっていた。

美しいと感じる風景は、なぜ美しいのか。「写し取る」ことでその謎に近づける気がした。

しかし、そのうちに道具は絵筆だけではないことに気がついた。科学だ。

科学では、目に見えるものの背景にストーリーがあり、より深く景色を見ることができる。浅間山からたなびく噴煙の形、厳寒に小川が造る氷の彫刻。自然の美しさには理由があって、それを理解できたときに嬉しかった。風や光、雷、星などの法則性を説く物理学の魅力に惹かれ、将来は物理学者になろうと決めた。

大学院で宇宙物理学の研究室に入った。しかし、そこは思い描いていたものとは違い、頭の良さを人工的なゲームに費やす利己的集団のように感じ、社会に出た。

しかし、いちど恋した科学への思いは忘れがたく、やがてはその近くに舞い戻ることになる。まったく予想しないときにその機会が訪れた。

大学院卒業後にメーカーに就職したが、夫が立ち上げた小さな会社を手伝うことにして退職。日々の糧を得るために、ウェブ制作などさまざまな仕事をしてきたある日のこと。出版の編集者が、先に本を書きはじめていた夫との打ち合わせのために事務所にやってきた。そのときの雑談で、自分の経歴と、いつか科学の本を書いてみたいという話をした。それなら「企画書を書いてみて」となり、最初の本を執筆することができた。2002年秋のことだ。

その後つらい時期もあったが、出会った人に恵まれ、その時々ベストを尽くし、今日に至る。気がつけば本は十冊を超えた。

JASTJに入れていただいたのも大きな出来事だ。同じ志を持つ方々に巡り会い、科学ジャーナリズムとは何かを問ひかけ、科学ジャーナリスト世界会議(WCSJ) 2013やSjCOOPで、一気に世界に視野が開けた。

シーカヤックのうえで、ふと思い出した。仕事で疲れた頃、大学を訪れて「私、いったい何をしているんでしょう」と恩師に愚痴をこぼした時、「人生なんてのはな、漂流でいいんだよ」と言われたことを。

ちっぽけな小舟に乗って、波にもまれ、アメンボのように進む。スイスイと進めないときの方が多い。しかし、ふだんは見えない角度から陸地を見て、なにかに気がつく。私の人生も、きっとそんなことでもいいと思う。

(JASTJ理事)

### CONTENTS

巻頭言	1
特集 JASTJ設立20周年	2
記念イベント「科学とウイナワルツのタベ」開催／講演「あかつきの金星再挑戦」／これからの10年／20年を振り返って	
ニュース	4
10月に科学ジャーナリスト塾開講／STAP問題で座談会	
ソウル会議準備会合報告	

例会報告(6月) 遺伝子組み換え作物	6
例会報告(7月) STAP問題	7
会員だより 創造力とビジネス世界会議	8
会員だより 防災情報を伝える	9
オピニオン	10
WEB編集長から	10
事務局だより	12

## 「科学とウィンナ・ワルツの夕べ」開催 音楽にのせて祝った“成人式”

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）は設立総会からきっかり20年目の7月1日、舞台も同じ日本プレスセンターで記念イベント「科学とウィンナ・ワルツの夕べ」を開いた。科学ジャーナリスト賞の審査でお世話になっている先生方を含め70人が参加、東京ヨハン・シュトラウス・アンサンブルが演奏するワルツやポルカを楽しみながら、成人になったJASTJを祝った。

科学ジャーナリストにとっても難儀の多い昨今だが、この宵は雑事から離れて、序曲はヨーゼフ・シュトラウスのポルカ『憂いもなく』。

室山哲也副会長の司会のもと、小出重幸会長がJASTJ設立のきっかけとなった1992年の第1回科学ジャーナリスト世界会議以来の幼年期を映像でふりかえり、「今晚は音楽と科学を結びつけて、美味しいお酒と会話を楽しんで下さい」とあいさつした。

第1曲はヨハン・シュトラウスが1864年にウィーンの作家・ジャーナリスト協会の新年舞踏会のため

に作曲したワルツ『朝刊』。曲の合間にゲストたちからJASTJの活動を励まし、ジャーナリストの奮起を促すスピーチをいただいた。

◆白川英樹・筑波大名誉教授

「賞の審査では、研究者とジャーナリストの評価は違いますが、違いは違いとして選考はうまくいっています」

◆米沢富美子・慶応大名誉教授

「日本が大きく変わろうとしている今日、ジャーナリストの役割は大きい。科学者も力を合わせたいと思います」

第2曲はヨハン・シュトラウスがフランスの新聞フィガロ紙に捧げた『フィガロ・ポルカ』。

◆相澤益男・JST顧問

「社会の意見を総括してしてくれるのがジャーナリストだと思っています。科学ジャーナリスト賞の選考委員としても、社会を見る目のレベルをひきあげる経験をしました」

## 「あかつき」の金星再挑戦めざす

「ヴィーナスに挑む」をテーマに講演いただいた宇宙航空研究開発機構の中村正人教授に、再び金星周回軌道に向かっている探査機「あかつき」の現状と今後のミッションについて寄稿してもらった。

◎ ◎ ◎

金星は自転周期が243日（地球日）と大変遅いのですが、ふしぎなことに惑星を取り囲む分厚い二酸化炭素の大気は4日で惑星を一周しています。この理由は今の地球の気象学では説明できません。

金星の持つ角運動量が大气に輸送されていると想像されますが、そのメカニズムについてはいくつかの仮説が提唱されていて、どれが正しいかの検証ができていません。これを解明する金星探査機「あかつき」が国のミッションとして認められたのは2001年のことでした。

開発は順調で2010年5月に打ち上げられ、同

年12月には金星周回軌道に投入される予定でしたが、投入動作の進行中に不具合をおこし、再び太陽を回る軌道に戻りました。主エンジンが破損し、軌道を制御する能力が落ちましたが、非力ながら姿勢制御用のエンジンを使って2015年末に再び金星周回軌道へ入ろうとしています。

「あかつき」は観測波長の異なる数台のカメラを搭載し、波長ごとに異なる高さの雲や微量気体の動きを追跡します。金星気象の理解は、いつか地球気象学を超える惑星気象学の構築へと実を結び、私たちは地球の気象をもさらに深く理解できるようになるでしょう。



講演する中村正人教授  
(撮影 山本威一郎)



記念イベントには約70人が参加、東京ヨハン・シュトラウス・アンサンブルの演奏とともに華やかに進行した。(撮影 高木勲生)

#### ◆北澤宏一・東京都市大学長

「80歳のおばあちゃんが『はやぶさ』の地球帰還に涙するように、ジャーナリズムによって科学技術に人間として感情が移入されることがあります。両者の関係がどうなっていくかを注目しています」

しばし懇談の時間をはさんで、後半はヨーゼフ・ランナーのワルツ『宵の明星』の演奏に合わせて、

宇宙航空研究開発機構の中村正人教授が「ヴィーナに挑む」と題して講演した。

次いで、ヨハン・シュトラウスの「トリッチ・トラッチ・ポルカ」をはさんで、牧野賢治・第2代会長が、JASTJ誕生のころの裏話を披露した。続いて2人のゲストからコメント。

#### ◆林良博・国立科学博物館長

「小保方問題は、面白おかしく伝えるジャーナリストが目立ちますが、正しい科学論争にして行くのは科学ジャーナリストの役割ではないでしょうか」

#### ◆水巻中正・日本医学ジャーナリスト協会会長

「私たちの協会とJASTJは同根です。2つの組織で何かやってみようかということで、この11月にシンポジウムを計画しています」

フィナーレは、ヨハン・シュトラウスのワルツ『南国のバラ』。この20年間、なにかとお世話になってきた皆さま方に捧げる花束ということで締めくくった。(JASTJ理事 武部俊一)

## これからの10年に向けて

### JASTJ 会長 小出 重幸

1994年発足後、JASTJは科学報道の存在を知ってもらう最初の10年に続き、科学ジャーナリスト塾、ジャーナリスト賞などの活動を展開、社会とのかかわりを一段と深めて20周年を迎えた。それでは、これからのJASTJはどう展開していくのか。現在の課題の中から先を見据えてみよう。

#### ■科学コミュニケーション

ジャーナリスト志望の人たちに、と呼びかけた科学ジャーナリスト塾。実際には企業人、歯科医、さらにノーベル化学賞受賞者も参加した。これは科学報道という枠を超えて、多くの人たちが、社会と科学の接点で活動する重要性、科学コミュニケーションの拡充を求めていることを裏付けている。2011年に起きた福島第一原子力発電所事故以降、この傾向は一段と増している。JASTJの活動も、報道と同時に、社会の様々な領域との連携が欠かせなくなっている。混乱の現場に軸足を置いた、多様なコミュニケーション活動が求められる。

#### ■国際連携

アジア諸国の科学ジャーナリスト養成支援を目的とした世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)との共同プロジェクト「SjCOOP Asia Project」が2013年に始まり、「東京会議」も2回を重ねた。国際社会

の中で日本の立ち位置を考えれば、活動の国際化は避けられない。こうしたプロジェクトには財政支援が不可欠で、JASTJ法人化などの課題とも向きあわなければならない。独立独歩の精神と外部資金活用体制をどう両立させるのか、今後最も重要な課題だけに、将来を見据えた議論を重ねたい。



小出重幸 JASTJ 会長

#### ■科学的手法・思考の普及と信頼回復

科学的根拠のない効能の喧伝や、被害を過大評価し恐怖心を煽るプロパガンダ……。疑似科学やリスク評価の混乱が社会的課題となっている。科学や技術の見張り役と同時に、Scientific approachとはなにか、そのモノサシを分かりやすく提示することも、JASTJの大切な役割。科学情報の混乱、科学を逸脱した報道などを交通整理する——。英国のサイエンスメディアセンターのように、科学者コミュニティと共に、社会にメッセージを発信、科学の信頼回復をサポートする役割も、担わなければならないと思う。

## 20年を振り返って

JASTJ 理事 牧野 賢治

日本の科学ジャーナリズム（ここでは医学ジャーナリズムも含める）の歴史は、少なくとも1950年代まで遡れる。しかし、科学ジャーナリスト間の連携（大阪での動きは別にして）は、たかだか4半世紀余り前からのことにすぎない。1987年に医学ジャーナリストの有志が医学ジャーナリズム研究会を立ち上げたのが最初だろう。その会員有志は89年に『科学は正しく伝えられているか』（W.バーキット著）を翻訳出版した。そして、参加メンバーはややずれるが、92年の第1回科学ジャーナリスト世界会議の東京開催、94年7月1日のJASTJ設立へとつながる。

JASTJ設立に際しては当然、会則が作られたが、92年に最初に作られた試案では、なんと年会費24万円。修正された93年の試案でも12万円となっていた。会員資格を狭く限定し、プロの科学ジャーナリストの団体を考えていたのだ。それでも高すぎるので、設立時に

は2万4000円（現在の2倍）で発足した。会費としてはまだ高額だ。

案の定、会員数は伸び悩み、私が2代目会長を引き受けた2001年には、先行きを危ぶむ声も聞かれた。その一方で、会の次年度への繰越金は増える一方というおかしなことになっていた。

### 会員増へ“荒療治”

そこで私が打ち出したのがかなりの荒療治。会則の大幅な改正だった。抵抗もあったが断行した。会員資格をゆるやかなものとし、プロのジャーナリストでなくても科学ジャーナリズムに関心をもつ人たちに門戸を広げた。年会費も1万2000円にした。そして、数百万円の積立金を有効に使って会の事業を活発化させたのである。この改革は3代目の小出五郎会長(故人)以下に引き継がれ、2002年の科学ジャーナリスト塾開

## ニュース

### 第13期科学ジャーナリスト塾 10月開講へ

JASTJは10月から半年間にわたって「第13期科学ジャーナリスト塾」を開講する。今期は「科学を伝えること」をテーマに、科学を伝えることの意義やあり方、さらに科学と社会をつなぐ方法について学ぶ。塾生として、科学ジャーナリズムや科学コミュニケーションに関心がある人を募集している。会員で相互に研鑽したい人、塾での学びや運営を応援したい人の積極的な参加を歓迎する（詳細は12ページ参照）。

科学ジャーナリスト塾が2002年にスタートしてちょうど12年。その間、運営形態などで変遷もあったが、今期は塾発足の初心にかえりボランティア精神に基づき運営する。そのため若い世代が主役となってテーマを設け、発信する塾を目指す。

3・11の東北地方太平洋沖の大地震・津波や福島第一原発事故、さらにSTAP細胞問題など、科学を伝える仕事の難しさが浮き彫りになり、その報道姿勢も問われている。今期は、科学ジャーナリストのこころざしと技をはじめ、これまでの試行錯誤や失敗体験の教訓、科学コミュニケーションの方法や工夫など実践例を学ぶ。

科学を伝える仕事に就きたいという若者の学びの場として、また新聞・テレビでの科学の解説者、フリーライター、科学コミュニケーターたちの経験を伝え合う場として期待してほしい。

JASTJ会員には、関心のあるテーマの日には一回でもよいので参加し、コメントをお願いしたい。サポートしていただける人は、塾担当者に申し出てほしい。会員の皆様の経験と関心・問題意識がJASTJの財産であり、それを塾という場で生かしていただければと願っている。

(JASTJ理事 佐藤年緒)

### STAP細胞問題で座談会 20周年記念出版物に掲載へ

「STAP細胞ねつ造疑惑・iPS細胞誤報問題」をテーマにした座談会が8月4日、東京・白山のJASTJ事務局の会議室で開かれた。新聞や科学雑誌の科学ジャーナリストらが参加、論文ねつ造の背景などについて議論した。この内容はJASTJ20周年を記念して発行する出版物に盛り込む。

座談会は、沖縄科学技術大学院大学の森田洋平氏の司会のもと、朝日新聞の浅井文和、毎日新聞の青野由利、日経サイエンスの古田彩の三氏が参加して開かれた。

論文ねつ造の背景や、科学のコミュニティーと社会との「不正」に対する受け取り方の違い、さらにこれまで科学ジャーナリズムが



座談会の様子。左から古田、青野、森田、浅井の各氏  
(撮影 藤田貢崇)



2002年に開講した科学ジャーナリスト塾で受講生を前に話しをする筆者（提供 牧野賢治）

講、05年の科学ジャーナリスト賞創設につながった。JASTJは危機を脱した。

会員数は創設時65人、03年80人からしだいに増えて、現在は220人になっている。この10年で2.5倍に増えた。

会員資格を広げた効果で、さまざまな人たちが入会してくれた。科学者、技術者、広報関係者、出版関係者、医師、一般市民、行政関係者、学生などいろいろな顔ぶれが会員になって、いわば新しい血が流れ込んだ。さまざまな思想や行動が議論や活動の輪を広げ、国際化も軌道に乗り、JASTJは力強く成長していると思う。

研究倫理問題を真剣に取り扱ってこなかったことや、今回の教訓をどのように生かしていくべきかなどにまで話題は広がり、熱のこもった議論が展開した。

会報などで告知したとおり、20周年記念の出版物は昨年度に実施した「科学報道の失敗体験に学ぶ」をテーマに開講した科学ジャーナリスト塾の講義を各講師が再構成、文章化した内容が中心となる。

過去の話題であっても、科学ジャーナリズムを語る上で外すことのできない水俣病報道や、最近のリスクコミュニケーションの話題まで、幅広く扱う。科学コミュニケーションを実践する若手のコラムなども掲載する予定だ。

今回の座談会は、これらに加えて、さらにより多くの人々に読んでもらえる内容とするために企画した。「科学ジャーナリズムを考えてみたい、学びたい」という人の必読書になるよう編集作業を進めている。

(JASTJ理事 藤田貢崇)

## 2015年ソウル会議の準備会合に参加

来年6月にソウルで開かれる第9回科学ジャーナリスト世界会議（WCSJ）のプログラムアドバイザーコミッティー（PAC）の一員に選ばれ、6月下旬の第1回準備会合に参加した。

海外組は私を含めて5人、韓国科学ジャーナリスト協会会長のシン氏（ソウル新聞医学専門記者）がホス

年	JASTJ に関連する主な出来事
1992	東京で第1回科学ジャーナリスト世界会議
1994	日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）設立
1999	ハンガリーで第2回科学ジャーナリスト世界会議
2001	東京で国際科学技術ジャーナリスト会議
2002	科学ジャーナリスト塾を開講
	ブラジルで第3回科学ジャーナリスト世界会議
2004	JASTJ 編『科学ジャーナリズムの世界』発行
	カナダで第4回科学ジャーナリスト世界会議 世界科学ジャーナリスト連盟が発足
2005	JASTJ 科学ジャーナリスト賞を創設
2007	豪で第5回科学ジャーナリスト世界会議
	JASTJ 編『科学ジャーナリストの手法』発行
2009	英で第6回科学ジャーナリスト世界会議
2011	カタールで第7回科学ジャーナリスト世界会議
	JASTJ 著「4つの『原発事故調』を比較・検証する」発行
2013	JASTJ 編『徹底検証！福島原発事故』発行
	フィンランドで第8回科学ジャーナリスト世界会議 科学記者研修 SjCOOP Asia 第1回東京会合
2014	SjCOOP Asia 第2回東京会合
	JASTJ 設立20周年記念イベント

トとなり、ほかの韓国側関係者も加わって議論を進めた。海外委員はきわめて協力的で、いくつかの基本方針を決めた。

ソウルでの世界会議は6月8日（月）にプレワークショップ、9日（火）から11日（木）

まで本会議という日程で、基調講演が5つ予定されている。その一つは「ぜひ山中伸弥さんに」とメンバー全員から懇請された。帰国後すぐに交渉を開始、OKをもらえたのでホッとしている。世界中の科学ジャーナリストが集まる会議に意義を認めてくれたからだと思う。

会議を貫く「トラック」（この意味合いもずいぶん議論した。日本語では「テーマ」といった方がしっくりくる）として、「エマージング・アジア可能性と葛藤」「科学技術と社会」「ニューメディア」「科学ジャーナリズムのトレンドとツール」「科学の話題」の5つが決まり、私は「科学技術と社会」の担当となった。ワークショップや分科会、スピーカーなどのアイデアを出していかなければならない。

「科学ジャーナリストが関心を持つセッションを科学ジャーナリストが主体となって運営する」というのが基本方針である。JASTJ会員諸氏もぜひ提案を寄せてほしい。



準備会合参加メンバーと記念撮影。前列左から2人目が筆者

(JASTJ副会長 高橋真理子)

## 遺伝子組み換え技術の可能性と課題

農業生物資源研究所の田部井豊氏に聞く

遺伝子組み換え技術は、生命科学分野の研究からバイオ産業、私たちの日々の食卓にいたるまで、なくてはならない技術だが、その安全性については不安を感じる人々もいる。6月18日の例会では、遺伝子組み換え農作物や食品（GMO）の利用、安全性評価の仕組み、開発の現状と今後実用化が進むと思われる新しい分子生物学的な育種技術について、農業生物資源研究所の田部井豊・遺伝子組換え研究推進室長に話を聞いた。

### 高機能化へ進む組み換え作物

「GMOの利用については現状を踏まえた議論が必要」——。田部井室長はこう前置きして、世界でのGMOの栽培状況や日本への輸入状況について説明、さらに安全性評価の仕組みや育種技術の現状について話し始めた。

近年、東南アジア地域では、ビタミンA欠乏による栄養不足解消を狙いとしたβカロチンを含む「ゴールデンライス」の実用化に向けた取り組みが進んでいる。一方、日本でも田部井室長の所属する農業生物資源研究所が、食べるだけでスギ花粉症を治療できる米の開発を進めており、世界初の農作物の形をした医薬品の実用化を目指している。医薬品としての安全性評価や製造に関する手順の標準化を進めているが、前例がないためその作業は手探り状態だという。

田部井室長自身は、殺虫性たんぱく質を作るGMタバコの野外栽培実験を実施、将来的にタバコによる殺虫たんぱく質製剤の生産を目指している。染色



新育種技術などの話題に聞き入る参加者たち

(撮影 高木朝生)

体ではなく葉緑体に遺伝子を導入することで、花粉飛散による他の栽培品種との交雑防止やたんぱく質の生産効率向上などが目標だ。

GMOはその安全性を巡って消費者にどう受け入れてもらうかが大きな課題になってきたが、田部井室長は1990年代後半以降、消費者とのコミュニケーション活動にも力を注いできた。その活動の中で、この20年間に関わり社会に受け入れられるようになってきたと感じている。「事実や科学に基づいた情報提供を基礎にしたコミュニケーションを通して信頼関係を築くことが重要。意見の異なる人同士がお互いを認め合う、共存できる社会を目指したい」と田部井室長はいう。



遺伝子組み換え作物の現状について話す田部井さん (撮影 西野博喜)

### 影響大きい新育種技術の登場

最後に、実用化が迫っている作物育種における新技術の動向について紹介してくれた。新育種技術（NBT：New Plant Breeding Techniques）と総称される一連の技術で、特にゲノム編集という手法は植物に必要な変異だけを効率良く与えられる。育種の過程では遺伝子組み換え技術を用いるが、最終的には導入した外来遺伝子を外すことも可能。伝統的な交配や自然突然変異で作りに出したのと同様の品種作りができる。

新育種技術の登場で、単純にGMOか否かだけでは議論はできない。どこに焦点を置くべきか、特に規制の観点からは各国が足並みをそろえないと世界の穀物流通に影響を及ぼす可能性もあると、田部井室長は指摘。「新育種技術は不要な遺伝子を取り除くこともでき、従来の遺伝子組み換え技術と互いに補完的な関係にある。市民の遺伝子組み換えに対する意識を変えるきっかけにもなるのではないか。産業界も注目している」と述べた。

(科学ジャーナリスト塾塾生 笹川由紀)

## STAP細胞と日本の科学技術 物質材料技術研究機構顧問の岸輝雄氏に聞く

東京・内幸町の日本プレスセンタービルで開いた7月30日の例会では、STAP細胞の研究不正問題をめぐって理化学研究所（理研）が設置した「研究不正再発防止のための改革委員会」で委員長を務めた物質材料技術研究機構顧問・岸輝雄さんに話を聞いた。話題は、STAP細胞の研究不正だけでなく、日本の科学技術が抱える問題点にまで広がった。社会現象にまでなったテーマだけに、JASTJ会員以外の出席者も多数参加した。

### 提言は「再出発の最低条件」

理研は今回の問題で3つの委員会を立ち上げた。処罰の対象となる不正の有無を調べる調査委員会、その背景を調べる点検委員会、そしてこれらの調査結果を受けて理研に提言するための外部識者による改革委員会だ。

「大変な羽目になった」――。岸さんの話は、そんな言葉から始まった。2つの委員会の調査結果を受けて提言するはずだったのに、3つの委員会がほぼ同時に並行して走ったからだ。そのため独自調査など大変な作業になると覚悟した。それでも何とか6月12日付で「研究不正再発防止のための提言書」をまとめあげた。

提言では、問題となった発生・再生科学総合研究センター（CDB）の解体に注目が集まったが、岸さんは「メディアの発信だけに頼らず、ぜひ報告書を全部読んで欲しい」と訴えた。報告書は理研のHPから入手できる。

岸さんによると、今回の提言の本質はSTAP問題とCDBを切り離すところにあるという。CDBの名前を残せば、理研はSTAP問題を永遠に引きずることになるからだ。「STAP問題は理研の中央で処理

し、新たなセンターを早急に立ち上げて研究体制を整えるべきだ」という。

今回の問題では、日本の科学技術のあり方が問われていると岸さん。理研などの独立行政法人（独法）は「大学と異なり、経営をチェックする機能がない」ことが最大の問題と指摘した。

国立大学は、経営協議会が学外識者も含めた学長選考会議で学長を選出するが、独法は理事長を主務大臣が任命する。理事はその理事長が任命するが、しばしば批判される天下り指定席である。

そこで改革委員会は、経営陣の半分以上を外部から受け入れ、研究公正推進本部を設けること、さらに不正告発の窓口を外部に設置することを提案。推進本部のチェック機能として外部による調査・改革監視委員会もおく必要があるとした。研究を行う限り不正は必ず起きる。それを前提にいかん防止するか、「新しいモデルを理研につくってもらいたい」と岸さんはいふ。科学技術基本法が施行されて20年。「日本の科学技術が曲がり角にきている」「提言は理研の再興と日本の科学技術を進めるための最低条件」という岸さんの強い思いが伝わってきた。

### 印象に残った最後のつぶやき

質疑応答では、「改革委員からの論文調査の要求を、理研が2回とも断った経緯は？」「再現実験は本当に必要なのか？」といった質問から、小保方晴子氏の博士論文問題の処理のあり方についてまで広がった。さらに、理事長の責任問題や海外の研究所の体制や広報のあり方、報道の問題点なども議論になった。

女性研究者の活用とは広告塔としての役割か、とも感じさせた1月30日のSTAP細胞最初の記者会見。それが研究倫理や科学技術のガバナンス、科学報道のあり方まで問う“事件”になってしまった。STAP問題を起こす背景について、「十分あったなあ」という岸さんのつぶやきが印象に残った。

（JASTJ会員 都丸亜希子）



STAP問題の根深さを指摘した岸輝雄さん（撮影 高木勲生）



理事長の責任問題に関する質問も出た質疑応答

（撮影 高木勲生）

## 刺激溢れるモントリオール

### ビジネス世界会議「C2MTL」報告

かつて日本の工業製品は世界中で飛ぶように売れた。戦後の日本には、新しい価値を次々と生み出す「創造力」があった。ところが私は最近、「日本企業の創造力が乏しくなった」と感じる事が多くなった。5月末に、創造力とビジネスについて考えるビジネス世界会議「C2MTL」が、カナダ・モントリオールで開かれた。この一風変わったイベントに参加したので、報告したい。

#### 創造力とビジネスをテーマに

C2MTLは英語読みではシーツーモントリオールだが、フランス語読みでセドゥモレアル。C2はcommerce（ビジネス）とcreativity（創造力）の2つの頭文字のことで、MTLはモントリオールの略称。毎年5月下旬に開かれる3日間のイベントで、ビジネスの世界でユニークな活動をしている世界的な著名人の講演やインタラクティブな展示、ワークショップ、パーティなどさまざまなイベントが展開される。今年が3回目で、40数カ国から約4000人が参加した。

C2MTLの目玉は、さまざまな分野から選ばれた超ユニークな30人のビジネスリーダーたちの講演。今年の演者は、映画「アバター」のジェームズ・キャメロン監督、グラミン銀行創設者でノーベル平和賞のムハマド・ユヌス博士、ハイヒールのデザインで有名なクリスチャン・ルブタンさん、通販サイトのトニー・シェイCEOなど。「ばかばかしいほど高い目標を設定すると、他のすべての成功より高いレベルの失敗ができる」「革命が君を見つける前に、君が革命を見つけろ」「危機は真正面から向き合わざるを得なくしてくれる」「世界を造っている男た



ユニークな世界のビジネスリーダー 30人が相次いで登場、映画「アバター」のキャメロン監督も講演した（撮影 引野肇）

ちは知らない。その半分がもし女性によって造られたらどれだけ素晴らしいかを」など興味ある講演が行われた。

展示発表では興味深い体験をした。ヘッドホンと3Dメガネを身につけると、まるで自分が別の空間に放り込まれたようなバーチャル体験ができる装置。目の前には見知らぬ人がいて、振り返ると出口のドア。もしこれが映画「13日の金曜日」の世界だったら、振り返れば今にも殺人鬼のジェイソンがドアから襲いかかってきそう…。

C2MTL参加証には最新のICタグが付き、参加者の会場内での動きがすべて記録される。もし講演会場が満員になったらすぐに会場の扉を閉めたり、はぐれた同僚をこのICタグで探し出すことも可能だという。

#### 日本がまるで途上国？

驚いたのは会場内のレストラン。同行のカナダ人がカードで支払いを済ませようとする、店の女性は自分のiPhoneを使ってカードを読み取り、請求金額が示されたiPhoneの画面を本人に示した。本人がサイン代わりに暗証番号を入力したら決済は終了。領収書は電子メールで本人に届くという。いまだに現金支払いが多い日本がまるで途上国のように思えた。

モントリオールには、芸術の域まで高めたサーカスの集団「シルク・ドゥ・ソレイユ」やユニークな航空機を製造している「ボンバルディエ」など、創造力あふれる企業がたくさんある。モントリオールの新型ホテルは、まるで最新鋭の劇場かクラブハウスのように未来感覚がいっぱい。ケベック人はみな、「モントリオールは多文化、多民族でできた街で、創造力にあふれている」と胸を張る。「英語ばかりのカナダ・アメリカでフランス語のケベック州が生き残るにはだれより斬新で新しいことをするしかない」という声も多かった。

多民族、多文化の対極にある日本。モントリオールのプラトウ・モン・ロワイアルの美しい街並みを散歩しながら、私たち日本人は、彼らとは全く別の方法で創造力を養っていかなくてはならないのだ、と思った。  
(JASTJ理事 引野肇)

## 防災情報を伝える 防災情報誌の阪本浩夫氏に聞く

今年の夏は広島市の土砂災害で多数の犠牲者が出るなど集中豪雨が多発、安全防災のあり方や災害リスクをどう伝えるかなどが議論になった。そこで安全防災関係の情報誌『予防時報』の編集・制作に長年携わってきたJASTJ会員の阪本浩夫氏に、安全防災を巡る課題などについて聞いた。

(聞き手はJASTJ理事 佐藤年緒)

——この夏はどのように過ごしましたか。

例年と同じく、エアコンの効いたオフィスからは極力出ませんでした。公式には熱中症予防、本音は「汗はかきたくねー」です。

### 防災の成果を見きわめて推進を

——気になったニュースは？

「平成26年8月豪雨」では、広島市の土砂崩れで多くの方が亡くなりました。でも、むしろ気になったのはその前の台風12号で、人的被害が私の危惧していた予想より1ケタ少なかったことです。

——人的被害が少なく、良かったと思いますが……。

もちろんです。ただ、それが単なる偶然なのか、防災関係者各位のこれまでの努力の成果なのか。成果だとすればそれを推進すべきでしょう。

——その話は、阪本さんの仕事と関連しますか。

私の中心の仕事がリスク（安全防災）情報誌の編集ですから、無関係ではありません。ただし、私自身が記事を執筆することはないので、仕事がらみの個人的な興味といったところでしょうか。

——具体的にはどんな仕事を？

『予防時報』の編集内容は、有識者を中心とした編集委員会で決まります。執筆者はおおむね編集委員が紹介してくれるので、基本的に私が執筆者を探すことはありません。原稿をいただいて校正し、印刷用のデータを外注して納品の手配をします。季刊誌ですから、3カ月ごとにこの作業の繰り返しです。

情報誌の発行者から編集業務の委託を受けている立場であり、厳密には情報発信のお手伝いですが、私自身はこの仕事におよそ20年携わって

ます。

——その間に、災害の内容に変化は？

新しい技術には新しいリスクも伴います。科学技術は日々進化しているわけですから、その意味では、どんどん新しいリスクが生まれていることになりま

す。しかし、あくまでも感覚的な話ですが、本質的なことは変わっていないと思います。

変化があるとすれば、私たちの感性の方かもしれません。自分の命を守るための勘とか、感覚が鈍くなっているような気がします。その結果、対応が遅れ被害が拡大しているのかもしれない。



阪本浩夫氏（撮影 佐藤年緒）

### 被災しないための正解はない

——昨年夏に気象庁が「特別警報」を新設しましたが、わかりにくくはないですか。

仕事上恥を忍んで言いますと、私も理解していません。でもわかりにくいと言っている方は、何を期待しているのでしょうか。被災しないための正解集やマニュアルなんてありません。極端な言い回しですが、自分の命を他人任せにしたあげく、責任も取れと言っているように聞こえてしまいます。

——研究者にはどうアクセスし、どう付き合っていますか。

以前『予防時報』にご寄稿いただいた執筆者は、JASTJ元会長の小出五郎さんからの紹介でした。ひとえに小出さんの人脈に頼ったわけで、会員の中には同様の犠牲者？が少なからずいるわけです。

——月例会など、JAST-Jのイベントへの参加は？

締め切りが重なり、身動きが取れないことがあります。参加したいと思うのは、仕事柄「防災」や「リスク」などに関わるテーマの時です。もう一つは、普通は入れないところに入れる見学会です。

——今後の科学メディアに求められることは？

「正解を発信しないこと」ではいかがでしょう。そもそも科学技術に100%はないのに、受け手は手っ取り早く正解を求める傾向にあるようです。事実の羅列に徹して、答えは受け手に考えてもらえれば、防災力の向上にもつながると思うのですが……。



最近号の情報誌『予防時報』

## 「平和と倫理」のための科学技術を

日本は「科学技術創造立国」を標榜している。私はこの方針に大賛成だ。イノベーションで国富をもたらすことで、戦後日本は発展してきた。しかし現在、貧富の差は広がり、原発震災で科学技術創造立国という心棒は揺らいでいる。我々は将来世代にどのような科学技術を残せばいいだろうか。私は、武器や原発輸出ではなく、「平和と倫理」にかなう科学技術を残さねばならないと思う。

しかし、気がかりな社会情勢がある。それは現状の「きな臭い雰囲気」だ。特定秘密保護法、集団的自衛権行使容認、武器輸出三原則、NHK 会長問題などだ。これらはすべて、戦争と平和に関係している。積極的平和主義のもと、再び日本が、戦渦に巻き込まれることがあってはならない。加えて、その戦火に今日の科学技術が悪用されることがあってはならない。

天皇陛下は昨年 12 月、80 歳の誕生日の会見で、平和について以下のように語られた。

「戦争による日本人の犠牲者は約 310 万人と言われております。前途に様々な夢を持って生きてきた多くの人々が若くして命を失ったことを思うと本当に痛ましい限りです。戦後、連合国の占領下にあった日本は、平和と民主主義を守るべき大切なものとして、日本国憲法を作り、様々な行政改革を行って、今日の日本を築きました」（一部抜粋）

NHK ニュースはこのとき、平和と憲法の部分を抜いて報道し、物議を醸した。

今後開発が進められるべきものは、廃炉技術や、核廃棄物・汚染水処分の技術開発などの他に、蓄電池や再生可能エネルギーなどが挙げられる。この再生可能エネルギーは、ドイツにおいて 25% を超えた。日本もそのような技術開発に邁進、国際貢献すべきである。武器や原発輸出ではなく、「平和と倫理」にかなうイノベーションで、世界一の科学技術大国になってほしいと思う。

(JASTJ 理事 林勝彦)

### WEB編集長から

幅広く使われているインターネットですが、インターネットウイルスなど、危険も確かに存在します。今回は、インターネットやJASTJの各種インターネットサービスをご利用いただく上でご注意いただきたい点をお知らせします。

#### ■セキュリティ対策ソフト

皆様のPCには、セキュリティ対策ソフトがインストールされているでしょうか。会社に設置されているPCであれば、セキュリティソフトがインストールされていないとインターネットに接続できなかったり、個人所有のPCをネットワークに接続できなかったりなどの社内ルールが定められている場合もあります。これらは、会社など組織のインターネットシステムにウイルスなどの脅威を侵入させないためです。一方で、個人が使用するPCにセキュリティソフトをインストールしていない人が全体の約2割は存在する、という調査もあります。

GoogleのGmailをはじめ、インターネットプロバイダー各社が提供しているWeb上で利用できるメールシステムでは、迷惑メールを排除する機能を備えています。

一方、Outlookなどを利用する場合は、やはりセキュリティソフトをインストールして、ウイルスへの感染を防ぐのが万全です。

最近のセキュリティソフトには無償で提供されているものも複数あります。これらを活用し、ご自身でお使いのPCがインターネットの脅威にされされることのないよう、ご留意いただきたいと思います。

#### ■メールングリストに迷惑メールが流れる？

JASTJ会員間の情報交換などに活用していただくために開設しているメールングリストには、さまざまなセキュリティ対策が行われており、このメールングリストで迷惑メールが配信されることはありませんので、ご安心ください。メールシステムやメールソフトの中には、「現在、不在にしています」や「携帯メールに転送できませんでした」というメールを自動的に発信するものがありますが、これらのメールもメールングリストには一切配信されません。

セキュリティ対策についてご質問がありましたら、遠慮なく担当までメール (system@jastj.jp) でご連絡ください。  
(Web編集長 藤田貢崇)

# JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2014年9月現在)



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



味の素株式会社



宝ホールディングス株式会社



鷗友学園女子中学高等学校



株式会社東芝



花王株式会社



日本電信電話株式会社



独立行政法人 科学技術振興機構



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



カクタス・コミュニケーションズ株式会社



株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



ロート製薬株式会社



サントリーホールディングス株式会社

賛助会員募集中

## ■ 新入会員の自己紹介

### ● 鳥山大 (法政大学)

藤田ゼミに所属する経済学部現代ビジネス学科4年生です。JASTJ20周年記念出版をお手伝いすることになりました。よろしくお願ひいたします。

### ● 信田 真由美 (東京大学大学院新領域創成科学研究科先端生命科学専攻修士2年)

学部では生物学と環境学を専攻。現在「アゲハ蛹の保護色形成機構の解明」という研究をしています。来年度からは毎日新聞の記者になります。科学環境部で科学と社会を結び付ける存在になりたいです。

### ● 平塚 裕子 (科学技術振興機構)

科学ジャーナリスト塾で科学技術を報道・伝えることの重要性を実感しました。まだまだ勉強することばかりですが、努力を重ねていきたいと考えています。

### ● 片山 宏昭 (日本放送協会制作局科学・環境番組部)

NHKでPDをしております。少しでも広い視野を持ちたいと考え、参加させていただきます。

### ● 木室 美生 (日本原子力産業協会)

日本の活性化のために、科学技術が社会にから理解され、その分野に若い人たちが夢を持つこと、そして様々な可能性が広がるように願っています。

### ● 徳田 剛 (法政大学経済学部)

藤田貢崇ゼミに在籍。比較的最近発表されたSF小説に関して、現実の科学技術の進捗度合いと比較し、考察したいと考えています。よろしくお願ひいたします。

### ● 中道 徹 (AE海老名・綾瀬法律事務所)

理系出身の弁護士です。大学(横浜国大)で知財を教えています。最近、研究不正について話す機会があり、科学について改めて考えたく、入会を希望しました。

## 退会

久野英雄 柴田佳秀 吉田隆嘉 岬暁夫

## ■ 第13期科学ジャーナリスト塾 10月に開講

第13期の科学ジャーナリスト塾を10月に開講します。詳細は以下の通りですので、会員、会員外を問わず奮ってご参加ください。(関連記事=4ページに掲載)

◎開催日:10月7日(火)から3月16日(火)までの第1、第3火曜日の午後7時~9時。10月7、21日、11月4、18日、12月2、16日、1月13(第2火曜)、20日、2月3、17日、3月3、16日の予定。

◎会場:千代田区内幸町のプレスセンタービル8階(特別会議室)

◎受講料:全体(12回)通しで15000円。会員が塾に参加する場合、1回1000円。非会員は1回2000円。

◎塾の主な内容は次の通り(変更する場合があります)

#### I) ころざしと技

関心・興味・動機を出し合う/塾創設の「ころざし」/映画「足尾銅山の光と影」を見る/ライティングの文章作法

#### II) 科学技術とディス・コミュニケーション

伝わらないという現象…医療現場でのコミュニケーション/食品や

## 編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**  
Japanese Association of Science  
& Technology Journalists (JASTJ)

## 会員の BOOKS

## 新刊紹介

### 科学ジャーナリストの半世紀 —自分史から見えてきたこと

牧野賢治著 (化学同人・2200円+税・2014年7月)



自分史を出版した理由は、自分の生きて証のためだ。ほとんどの人にとって他人史は興味を引かないだろう。ただ、自分史ではあっても「科学ジャーナリスト」の生きざまと仕事ぶりの記録。年配者はともかく、若い科学ジャーナリストに読んでもらえるとありがたい。エピソードで綴っているが、それにまつわる現代史にもふれ、普遍性をもたせる工夫をこらしたつもり。成功したかどうか。(JASTJ理事 牧野賢治)

### 電子立国は、なぜ凋落したか

西村吉雄著 (日経BP社・1800円+税・2014年7月)

2013年に日本の電子産業の貿易収支は赤字に転落した。国内生産金額は全盛期の半以下である。電子立国とまで讃えられた日本の電子産業が、なぜここまで凋落してしまったのか。特になぜ他産業ではなく電子産業で、他国ではなく日本で、この凋落が起こったのか。その原因を、歴史を遡って調べている。電子産業では「設計と製造の分業」、「ハードとソフトの分業」に技術的必然性がある。その分業を日本企業は嫌い続けた。これが日本電子産業衰退の最大の原因と本書は主張する。(JASTJ会員 西村吉雄)

### 学船 北海道大学 洋上のキャンパス おしよる丸

藤田良治・湯浅万紀子著 (中西出版・1500円+税・2014年7月)



1909年竣工の初代「忍路丸」から、一世紀以上にわたって北海道大学水産学部の教育・研究を支えてきた「洋上のキャンパス」を豊富な写真とともに解説。スマートフォンやタブレット端末で、ARアプリを使って映像を楽しむこともできる工夫を凝らした。(JASTJ会員 藤田良治)

遺伝子組み換えのリスクコミュニケーション/「失敗を語る」に何を学んだか……原発、地震、防災、IT技術

#### III) 実戦に役立つ

科学編集・ライターの仕事をするには/環境・宇宙分野での取材・まとめ方、本の出し方/WEBでの発信効果と留意点

#### IV) 地域から世界に

地域を掘り下げて世界を見る/ドキュメント映画「いのち」のストーリー/塾で何を学んだか

塾は毎回、サポーターとなった会員が進行にかかわり、話題提供者の話に聞くだけでなく、議論を重視する。期間中、塾生はJASTJ月例会に無料参加できるほか、会報の執筆に挑戦する機会もある。

## 編集 後記

▶今号ではJASTJ設立20周年特集のほか、10ページの新設コラム「オピニオン」にもご注目ください。今後、随時掲載しますので、皆様も気軽に寄稿ください。

〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館5F  
電話・FAX: 03-5689-7191 Email: hello@jastj.jp  
会長/小出重幸、事務局長/引野 肇  
編集長/高木 毅生